昭和35・36年における国語学界の展望

資料・辞書・索引

小林芳規

国語資料には、文献に限らず現代語の口頭語も含まれ、その種類も数種が挙げられているが（橋本進吉博士著作集第一巻所載「国語学研究法」）、過去二ケ年間において、日本語考察の意図のもとに、資料そのもの又はそれについて、新たに公表されたものとなると、「文献」が主対象となる。しかも管見の限りでは種類も量も多くはない。中世末期ころの外国人の手に成る諸資料と、訓点資料および近世語学書の複刻・論注がそれで、量の少なさに比べて、しかし質的には有用なものである。

中世末期ころの国語史の資料としていわゆる外国資料が次々と複刻され当期語の音韻・語法等の考察に資せられて来たが、この両年も朝鮮資料たる『重刊改修捷解新語—本文・国語索引・解題—』（昭35・9）と、シナ資料たる『全浙兵制考日本風土記—本文、国語・漢字索引—』（昭36・9）とが、京都大学国語学国文学研究室から公刊された。既刊の朝鮮資料二点に加えて基本資料四点を同研究室から世に送ったことになる。外国資料といえばキリシタン資料を偏重しがちな風潮にある折から、同研究室の壮挙は意義が大きい。これで稀覯の資料が一般学徒の利用に供せられることになった。ただし国語資料としての限界には常に心すべきで、安田章氏の解題は周到にして有益である。（『日本風土記』については、最近では福島邦道氏の要を得た紹介「国語学48」や、考察「未定稿8」（昭36・3）がある）。岩波版『日葡辞書』の複刻（昭35・12）（土井忠生博士の簡潔周到な解説を付す）は、キリシタン資料の弘通史上、かのロドリゲス日本大文典の翻訳版と共に注目に価する。国文注釈書にまでかく頻用されることはかつてなかった。本書が当期語考察の上に果す役割の大なることはいうまでもないが、日葡辞書過信のあまり、誤引が屢々見られる。森田武氏が注意されるように、葡語史の配慮や誤謬を考慮した上での解読が必要で、資料的性質を見究めた忠実な理解・利用が希まれる。印刷技術への不満（亀井孝「国語学44」）や解説についての批判（川上蓁「国語研究11」）も参考になる。また、『吉利支丸教義の研究』が稿本進吉博士著作集に再録された（昭36・3）（原本の複製は欠く）。精確な翻字（亀井孝氏の解説によれば、補正を要するものは頭注の「ソソク」一つという）や周到な考証に、再び襟を正す思いがある。この書がかつて東洋文庫論叢の一として出された昭和初年に比べて、多くの外国資料を机右に備えられるようになった後生の幸せを身に覚える。高羽五郎氏が「国語学資料」の提供も忘れてはならない。『スピリツアル修行（原文）V』（昭35・5）、『ロザリオの経翻字篇四』『譬喩尽八』（昭35・12）の完結をもって休止されたが、ここ十余年になした功績は大きい。

訓点資料の模刻・解読・解説等は、訓点語学会々員を中心に着実に進められた。『訓点語と訓点資料』（以下『訓誌』と略称）は13輯（昭35・2）・14輯（昭35・10）・15輯（昭36・1）・16輯（昭36・

4)・17輯（昭36・6）、18輯（昭36・10）・19輯（昭36・11）を出した。また大坪併治博士の大著『訓点語の研究』（昭35・3）も出た。後者には、平安初期から中期にかけて十種の重要資料の詳細な解説がある。岩淵本願経四分律古点、石山寺本弁中辺論延長点の二資料は本書で初めて解説されたもので、訓点語の諸事実を記録した功績は大きい。解読文には曽田文雄「興聖寺本大唐西域記巻十二併解読文」『訓誌14・15』・同「西南院本甘露軍茶利菩薩供養念誦成就儀軌康和点併解読文」（『訓誌19』（解説は『訓誌17』）、稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本百法顕幽抄巻第一古点試読」（「武庫川女子大紀要7」）、松本健二「大東急記念文庫本大日経義釈巻十三併解読文」（『訓誌16・17』（解説は「かがみ5」（昭36・3））があり、模刻には新発見の遠藤嘉基「西南院蔵和泉往来（『訓誌17』）、「補正」（『訓誌18』）、「あれこれ」（『訓誌19』）、『語文研究10』（昭35・5）、築島裕「猿投神社蔵文選序古点」（『訓誌14』）、小林芳規「猿投神社蔵正安本文選」（『訓誌14・16・18』）や、中田祝夫「東大寺図書館蔵釈摩訶衍論承元元年点」（『訓誌16』）があり、索引に築島裕「長承本蒙求字音点(三)—画引索引—」（『訓誌13』）、書目に遠藤嘉基「吉沢義則編点本書目の補正（その二）」（『訓誌13』）がある。これらはこの学の拡がりを反映して、平安初期の空白を補うだけでなく次第に院政期から鎌倉時代資料にまで広く関心が移っていることを示している。訓点資料が国語音韻史に大切な資料を提供したことはいうまでもないが、それは平安時代に限らず鎌倉時代の間隙を埋めることもできる。例えば正安本文選には「オ段長音の開合」の問題例や連声の確例、拗音表記の崩れを知る例も存する。これらはこの資料だけでなく梅沢本本朝文粋正安元年点や鎌倉時代加点の白氏文集などにも多く存する。この方面の調査が進めば、右の乱れは「古文書および碑文にみられるもの」（前掲『キリシタン教義の研究』解説）とか、文献の成立の論拠に応用して右の乱れが存するが故に当該文献の成立を室町時代以降とする類（日本古典文学大系『宇治拾遺物語』解題）の言辞は避けられることになるであろう。築島裕「訓点資料とその取扱ひ方」（「国語と国文学」昭35・10）は訓点資料の現段階における一応の整理として後進を導く所が大きく、又訓読語研究にはまだ多くの資料蒐集整理という、研究の前段階の操作が残されていることを知る。

外国資料と訓点資料とは、活用時期に遅速はあったが、共に第一等史料として、国語史研究を躍進させた。開拓された時代語は前者が中世末期、後者が平安時代に重点があった。国語史を時代別に顧みれば、鎌倉時代語も近世後期語も十分に解明されていないと思う。それには当代語の基本資料の探究整理が必要で、後者については近代語学会の会員の活躍が期待される。前者に近いものには、福島邦道「音韻資料としての世阿弥自筆本」（「言語と文芸」昭35・11）のような既知の資料の史料としての再検討もあるが、当代語の総合的調査は十分果されていない憾みがある。例えば、東大寺学僧宗性上人の遺著のごとく、量も多く、質的にも片仮名交り文（当時の口語を多く含む）・訓点本・変体漢文・平仮名消息など豊富な好資料を持ちながら、漸く仏教史家によって、平岡定海『東大寺宗性上人之研究並史料(下)』（昭35・3）（上・中は既刊）の整理が成った程度である。

近世国語学書の複刻・校注に、中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』（昭35・4）と、竹岡正夫『富士谷成章全集上』（昭35・3）、および三木幸信『活語余論四・五・六』（昭35・12）がある。『あひ抄新注』は深い読みに支えられた頭注と「あゆひ活用図」を創った解題とが本書を単なる複刻ではなく、「あゆひ抄」ないしは学書の注釈史上画期的なものとしている。『成章全集上』は、「刊本かさし抄」「稿本あゆひ抄」（あゆひ抄の成立過程を窺うに貴重である）「刊本あゆひ抄」「よそひ本抄」「万葉類語」および歌学稿の「六運

略図」等八書の翻刻と、前三書に詳しい論注を加えた輝かしい業績である。近時の思弁的方向に進んだと評される文法研究の反省の資としても時宜を得たものと思う。「活語余論四・五・六」は松尾捨治郎博士の跡を補われたもので、三木博士の義門研究の一業績であり、詳細な注は本文読解に資する。学説研究は本文の正しい理解の上に築かれるものであるから、かかる資料の公刊は更に盛にありたい。竹岡氏の「『結奥呂』（「未定稿9」（昭36・9）の翻刻は『全集(下)』を補うものである。

現代語について、国語研究所「同音語集」（『同音語の研究』昭36・3）、『総合雑誌の用字』（昭35・11）がある。実践にはこのような調査およびそれから得た理論の裏付の要を、今日特に痛感する。

文献以外の資料にふれたものには、金田一春彦「音韻史資料としての真言声明」（「国語学43」）が、現在真言宗に伝わる声明に古い発音を伝えることを八曲の声明の解説によって述べている。

さて、右述の資料公刊は、従来の国語史の重点が、国語の文法史・音韻史にあった反映と見られる。しかし国語史の課題が近時のように広く表記様式史や文体史・語彙史等に及び更に言語生活史に転ずれば、過去の凡百の文献が資料となる。しかしそれらの理論の裏付けに堪える資料の探求整理は国語史家には十分できていないかと思う。少くともこの両年について言えば、歴史学・国文学・書道史等の隣接学の人々の手になる業績に頼らねばならない。私はその方面の情報にうといので、以下管見に入ったものを列挙するに止める。

歴史家によるものに『大日本古記録』（「殿暦一」昭35・12、「臥雲日件録抜尤」昭36・3、「梅津政景日記六・七」昭35・3、昭36・3、「小右記（二）」昭36・6、「言経卿記二」昭35・3）、『大日本史料』（「八編之二十三」、「七編之十七」、「八編之二十三」、「十編之十」、「十二編之四十一」昭35・3、「八編之二十四」昭36・3）『大日本古文書』（「家わけ十八東大寺図書館蔵文書之二」、「家わけ十九醍醐寺文書之三」、「幕末外交関係文書之二十」、昭35・3）、『大日本近世史料』（市中取締類集二、唐通事会所日録三）、『天草古切支丹資料㈠㈡㈢』（九州史料刊行会、昭35・3、昭35・9、昭36・3）、『実隆公記』（巻六上、昭36・6）および「実隆公記」（巻三下、四上下）の再版、『鹿苑日記』（巻一―六）の再版、久我家文書の連載（「国学院雑誌」昭35・4、昭35・6、昭35・8～11、昭36・1～4、昭36・6、昭36・9、昭36・11～12）など量が多い。（『群書解題』も十二冊が出た）。これらは平安時代から江戸時代にかけての主要な日記・古記録を編纂し、歴史家の基本史料として公刊されたが、国語史料としても文体史・語彙史考察に有用であり、桑田忠親『利休の書簡』（昭36・1）のように音韻史にも有益なものもある。例ば利休の『末期の文』（天正十九年二月）には「西之浦すじ(筋)弥三郎事」「中すじ(筋)の事也」があり、又「いまだ少々あひがん(哀願)計候」（天正十三年八月）「そうさなきようにいたし」など新しい用例を知るのである。

国文学関係者による平安時代作品の文献学的研究は、近代文献学の開始以来半世紀を経て、資料の探索・処理の段階から分類整理の段階に到達し、本文批評として諸種の重要作品の校本がこの二ケ年間にも引きつづき成った。福井貞助『伊勢物語に就きての研究、校本補遺篇』（昭36・12）、小松茂美『後撰和歌集、校本と研究』（昭36・3）、玉上琢弥・柿本奨『蜻蛉日記本文篇』（昭36・9）池田亀鑑『校異紫式部日記』（昭36・11）、秋葉安太郎『校本大鏡（大鏡の研究）』（昭36・9）がある。また本文資料の類聚に久曽神昇『古今和歌集成立論、資料篇上中下』（昭35・7、9、12）、萩谷朴『平安朝歌合大成四、五』（昭35・7、昭36・10）があり、未公刊の資料の翻刻に田中重太郎「山本嘉将博士蔵堺本枕草子下巻複製」（『枕冊子本文の研究』付載、昭35・12）、大橋清秀『和泉式部日記の研究』（昭36・11）、玉上琢彌「対校隆能源氏物語絵詞」（「女子大文学国文

編」昭35・2)、上村悦子「かけろふの日記下」(「平安文学研究24～26」連載)などや私家集の翻刻など盛んである。これらを国語史料と見るときは、『平安朝文法史』の時代より遙かに整理され厳密になってはいるが、如何ほど原初的な形態を求め原著者のそれに迫ろうとしても所詮転写主体の投影を考慮しなければならない。この点で同じ国文学者松田武夫博士の「文献学的研究の批判と推進—古典本文への伝承主体の投影—」(「国語と国文学」昭36・5)の提言は、国語史料と見るときは一層深刻に響く。むしろ国語史の一等資料、例えば訓点資料等の帰納から得た事実に基づいて逆にその表記等を検討し古形の残存状態を判定するのも一方であろう。小林芳規「梁塵秘抄の表記の検討」(「王朝文学4」昭35・8)は従来口語法別記のまま不用意に採っている江戸時代転写本のそれの信憑性を表記の面から検討したもので、右のような見解に基づく試みである。

中世以後の国文資料になると事情は異なるものもあるし、量も多くなる。「屋代本平家物語」(巻三—巻五、「国学院雑誌」連載、昭36・3月まで)、「未刊御伽草子集と研究㈠」(昭35・9)、「神道物語集」(昭36・6)や鈴木勝忠『未刊雑俳資料』(五～十一期)の近世文芸作品の複刻、はては明治大正期の作家の書簡等の紹介までその量は多い。碧沖洞叢書には中世近世の作品の翻字を多く収め、続日本歌謡集成・古典文庫・岩波文庫の複製、翻刻も国語史にも大事な資料を含む。又『新古今諸注一覧』(「説林別刊」、昭36・11)は新古今の諸注の所在を中世以後五十五の注釈から歌ごとに示してある。

書道史家の手に成るものに、平安時代の仮名消息の新資料の解読と解説がある。伊東卓治「正倉院御物東南院文書紙背仮名消息」、田村悦子「西行の筆蹟資料の検討—御物本円位仮名消息をめぐって—」(共に「美術研究二一四」昭36・1)は平安時代の平仮名文の基本的資料として表記様式史の上に有用であり、又語法・音韻史面でも前者に「はんべり」、後者に「けう(興)なく」が存する。

資料の探索は、仮名消息に限らず続けられる要がある。その意味で近刊の『肥前島原松平文庫目録』(昭36・12)、『加賀文庫目録』(昭36・4)、『天理図書館古活字本目録』(昭36・10)、『北岡文庫蔵書解説目録—細川幽斎関係文学書』(昭36・12)、『図書寮典籍解題漢籍篇』(昭36・11)、『内閣文庫国書分類目録上』(昭36・3)は有力な手がかりを与えるものである。

最後に。資料の面にも時代の影響ないしは時代の動きと類似なものが現われる。第一は啓蒙的全集の刊行で、朝日古典全書と日本古典文学大系が引きつづき出されたことである。後者はこの二年間に二十四冊を予定通り配本した。啓蒙的意図を持ちながら、テキストの正確な翻字と行き届いた校異を持って、最も古い本文の採用(謡曲)、覚一本に関する一つの定本作成(平家物語)、未公刊の本文の公刊(源氏物語・大鏡・歌舞伎脚本集・連歌論俳論集)などで定評がある。語彙索引や国語学論文の底本に採られて共通の論考の場をも与えている。又注解には国語資料の利用、国語学の常識の生きたものがあり、注釈術が国語学の領域に入りつつある印象を持つ。他に国語学徒の手になる注釈に、関根慶子、小松登美『寝覚物語全釈』(昭35・9)があるがこれは、山岸徳平『八代集全注』と共に始めての全注・釈である。

第二は古書複製等の再版である。古辞書『饅頭屋本節用集』(昭36・2)、『天正十八年本節用集』(同)、『乾本草書節用集』(昭36・11)、および『吉沢義則校注延慶本平家物語』(昭36・7)で、古辞書の再版は引続き行われている。これは注釈書に国語資料の利用が盛になった世情と無関係ではなかろう。高価な古本に嘆いている者の渇をいやしてくれて有難いが、旧版のままでかつ印刷の不鮮明なのは残念である。古辞書には索引や解説付でありたかった。亀井孝編『五本対照改編節用集』(㈠「あ—い」昭35・8、㈡「いーお」

昭36・6）が偶々その要求を満すことになった。これは黒本本・伊京集・天正本・饅頭屋本・易林本を五十音順に改編したものだが、見出し語に清濁などの考察が行き届いて、使って楽しい。又『延慶本平家物語』の吉沢博士校注本には、一行以上に及ぶ脱文・脱字・倒錯など相当数の誤謬の存することが木村晟「吉沢博士校注応永書写延慶本平家物語の本文(一)」（「かがみ5」昭36・3）に指摘・一覧されているが、このような労作が採用されていないのは口惜しい。かの本の表記様式は中世のそれを代表するもので、翻字ではなく、複製そのものが渇望される。広島大学文学部国語学研究室編『校本千字文字書』（昭36・5）が、旧校勘本に、その後発見された図書寮本名義抄との対校を加えているのはさすがである。

複製本では、『静嘉堂文庫蔵運歩色葉集』（36・1）と貴重古典籍刊行会『大唐三蔵玄奘法師表啓』（昭35・6）（山田忠雄氏解説）が公刊されたが、古文献の複製事業が戦前に比べて振わないことも、又この両年における第三の傾向といえよう。

辞書　古辞書についての書誌的・語史的考察は「国語学史」の項に譲る。従って本項では現代人の編著になる国語関係辞書が対象となる。

平山輝男編『全国アクセント辞典』（昭35・6）が二ケ年間の辞典については最大の収穫である。同時にこのアクセント専門の辞書の実現は既刊の金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』と並んで辞書史上画期的な業績である。後者が東京アクセントに重点をおいたのに対して、全国的視野と平山博士のアクセント系譜とによって、所収語十万語について東京・京都・鹿児島のアクセントを併記し、始めて現代京都アクセントの辞書が完成した。複合語や各活用形、諺のアクセントまで示しており、昭和三十年代のアクセント記述として国語史料ともなる。

これに比べて国語辞典の面では前年までの低調な傾向がこの両年も続いてまだ戦後の観がある。ハンディな当用辞書の新刊・再刊の氾濫はおびただしい。今日ほど辞書が出版事業に顧みられ又多くの国語学徒が編集に参加するということはかつてなかったであろうと思われる。無論、部分的には新見や検索法などに工夫がこらされてきてはいるが、内容は、例えば用例が依然として大日本国語辞典や大言海の孫引であったりする。当時より学問が精細・広範囲になって、「資料」に見るごとく本文校訂も厳密に、新資料も加わり、訓点語彙も採集され、注釈面にも新しい成果が上り、諸種の索引も増加し古語の清濁の復元も字音仮名遣の究明も進んでいる。これらの成果をもっと積極的に取り入れたいものである。

ただ右のような辞典の編集に参加した学徒がそれによって次第に開眼されて、従来自明として顧みられなかった諸問題―意味の分析と記述、同語別語の識別など―に気づき、本格的な辞書の論を希む声として、水谷静夫「語釈―本格的辞書の論の前座―」（「国語学47」）、「わたくしたちの国語辞書・特集」（「言語生活」昭36・3）が提出されたのは、一つの動きとして注意される。

辞書の編纂法については既に明治時代の先学によって論説されている。しかし現実には意味論の未発達や、時代語別記述の未開拓―われわれは中世語辞典を持たないしその基礎としての中世語の索引も少ない―、和語中心でなく近世以前の国語の中に存する漢語あるいは記録語の記述も不十分であって、今日の辞書は多くの欠陥を持っている。要は実践にあろう。国語学者の中に、語法あるいは文体を専門と称するように「辞書」に専ら取組む人も必要ではないか。

索引　最近の研究書や注釈書には付録的に主要語句・事項、和歌索引などを付けるのが一般であるが、本項では「索引」そのものが独立した形かないしは校本などと一緒に公刊されたものを扱う。

索引公表の形式は、その制作目的の違いで異なっている。一は、④当面の目的が制作者自身の次に予定する体系的総合的記述等にあ

ってその手がかりとするとか、㋺本文の付随的位置にあってその資料を正しく把握するとか、㋩あるいは記述的辞書作製の基礎資料とするとか、又は㋥作成過程そのものに教育的意義を認めるとかいった当面の目的の手段として従の立場にある場合で、他は㋭現在および将来において誰かがいつか益を蒙るであろうという予想の上で、それを当面の目的とする場合である。しかし後者においてさえも利用者は何らかの目的を以て検索するであろうから、いずれにせよ索引そのものは手段である。とすればより有効に活用できるための技術が問題となる。今日までの所そのような「技術の論」を聞かないが、それは不必要だからではなく、索引公表の盛行が最近の事だからであろうと思う。

二ケ年間における日本語の語彙索引を目的から見ると、「資料」に既述した『重刊改修捷解新語』『全浙兵制考日本風土記』の付載索引や、『伊勢物語に就きての研究』『大鏡の研究（本文篇）』『紫式部日記』「虎清本狂言の総索引」（『研究史大成謡曲・狂言』付載）の付載総索引は㋺ないし㋩と見られる。索引は遺漏や矛盾・無意味な重複のないことが基本条件だが、又正しい本文や正確な読みの上に作られねばならないから、これらは所を得ているし、他面本文の資料性を高めるに役立っている。

㋩は風間力三『土佐日記動詞分類索引』（昭35・6）が挙げられる。これが、同氏の前作『伊勢物語動詞分類索引』を受けて共に特異な配列によっているのは、「語彙史および文法史に資するための分類語彙を意図」しているからで、このような索引の積み重ねが語彙論・語彙史等に有力な働きかけをするはずである。この種の索引なら、先に山田博士の『土佐日記索引』があっても重複しない。同一作品に索引が二種以上あってもよいという言は、右の意味において首肯できる。

正務弘『平賀元義歌集用語索引』（昭35・10）（自立語のみ）は㋭と見られる。第二の立場での索引は、第三者の利用という点から考えて客観性に徹することと便宜主義という、矛盾する二面の度合で形式が様々となる。例えば、配列の基準としての仮名遣の問題、漢字表記語の処理（索引の対象が中世文献に拡がると一層切実になる）、所拠文法体系などに問題が存する。

漢字索引には、森山隆『古事記漢字索引、本文篇㈠』（昭35・3）植垣節也『風土記漢字索引(1)（常陸風土記）』（昭36・6）があり、前者には音仮名整理の意図が窺われる。『大漢和辞典』の最終巻の『索引（巻十三）』（昭35・5）には「総画」「字音」「字訓」各索引の外に、中国における「四角号碼索引」をも収める。

人名・件名索引に、筏勲『正倉院文書大宝・養老戸籍の人名語の索引㈠㈡』（昭36・1）、熊谷幸次郎『続日本紀索引、件名・雑件(上)』（昭35・10）があり、『日本古代人名辞典』は三冊目（きーさ）（昭36・4）が出た。

右らの索引の大部分が私版の謄写印刷である。編者の労苦が窺われると共に、索引公表はこの両年も厳しい現実に立たされたことが考えられる。

時代別に見ると上代が最も多く、平安時代の文学作品が次ぐ。これは上代文献や平安時代作品には本文の整備が大体出来て来たことと無関係ではない。更に中世期の諸資料をはじめ近世以後の資料についても、それぞれの目的に応じて諸種の索引の作製公表されることが希まれる。

〔付記〕編集部から寄せられた抜刷は数点であったので、本項関係目録作成に大久保強・宮田裕行・福地昭助・六川嘉幸・松本文彦諸氏の援助を得た。又国史史料について石井英雄氏の、国文学資料について神作光一氏の教示を仰いだ。記してお礼申し上げる。